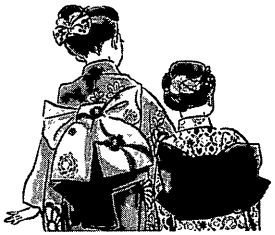
宮坂静生推薦　岳　1月

初時雨グリッサンドの指熱し　岩井かりん
暾の沖へ沖へ梵天立てにけり　有手　勉
渡り鳥歩かぬ我はわれならず　我妻民雄
夜学の灯子らの眼窩をいや深く　志摩晴樹
秋旱腰の坐れる呂宋壺　川村五子
陰が翳生むやうに咲く帰り花　田中純子
月光の弦張るごとし浄瑠璃寺　原田宏子
白雪糕もんペスーツで売りさやか　松井　弓
漉油枯れて白きに残る蒼　金子圭子
冬ざれを来て魔術師の口から火　竹岡みち子
水蜜桃迦陵頻伽の声欲しき　宮澤羅夢
尖るものつつむ津軽の雪降れり　田村道子
名月の檄や糸満大綱引き　上江洲萬三郎
一両の列車の矜持今朝の冬　白勢　修
地を叩き祖とつながる十日夜　古畑富美江

*



青北風や磨き抜かれし八点鐘　宮岡光子
神の留守青ざめてゐる海の底　池間キョ子
幕末はつるんと脱げし衣被　高橋秀雄
もの忘れ一気につのる野分あと　横地妙子
鶏頭のなんまんだぶと倒れけり　石川定雄
目の大き能登の魚へ白き息　熊倉まりあ
にんにくを植う末法の世に備へ　栗原利代子
氷上のクイーン手脚すーっと伸ぶ　森　みゆ紀
秋天にスマッシュを打ち男逝く　長島　環
来っ寝とて優男なむ狐待つ　森　千恵子
たましひの抜けるまで佇つ枯蓮　神作仁子
稲滓火の青き魂抜けて終ふ　倉科繁登
稲叢の濱口梧陵津波の日　瀬戸正男
句一つを藜の杖と冥土まで　渡辺　光
冬近しカミンフェガーが戸を叩く　田多井勝喜

半世紀への光――岳俳句一月　同人集・岳集から(557)

宮坂静生

巻頭言　年が改まる。旧年には米寿界隈のお祝いをしていただいた。その余蘊の中で新しい年を迎える感慨は峠越えというたいそうな思いでなく、ひょいと友人に出会うような気持である。やあやあという気分だ。嬉しいのは俳句という表現の器を持っていることである。この器に新しい年はどんな思いを盛ることができるであろうか。生な感情は漠然として捉えようがなくても、俳句に表現しようとすると、一抹の余裕が生まれる。浮力がつく。日常の生活の場では重くても、お芝居をする気分になる。俳人の俳は人に非ず。おれがおれがではなく、変身すること。そこにちょっぴり自由がある。

津軽の雪――尖るものをつつむ寂しさ

尖るものつつむ津軽の雪降れり　田村　道子

津軽に惹かれる。昔、深田久彌の小説『津軽の野づら』の題が気に入り、古本を買った。着物を質に金を借りる話を読んだことを不意に思い出した。津軽の雪は竹林のように尖るものを埋め尽くす。「つつむ」がいい。なにもかもつつむ雪がいい。りんごの花咲く津軽を尋ねただけであるが、雪の津軽は「人体冷えて」、ひたすらりんごの花咲く季節を待つ。〈人体冷えて東北白い花盛り　金子兜太〉その津軽に惹かれる。

初時雨グリッサンドの指熱し　岩井かりん

気合いが入る。ピアノやハープなどの鍵や弦を端から端へ指で一気に奏でる演奏がグリッサンド。初時雨の気負いに演奏者の熱気が響く。出だしの母音〈a u i〉、終わりの母音〈a u i〉の偶然の一致が半円を描くようだ。

渡り鳥歩かぬ我はわれならず　我妻　民雄

歩く。原始以来のスタイルは歩くこと。車駄目。駄目駄目。北京原人現る。反社会的であるが、実はこれが超現代。これからのスタイルであろう。吹聴するでもなく、わがスタイルというのがいい。所詮みんな渡り鳥稼業。同感する。

夜学の灯子らの眼窩をいや深く　志摩　晴樹

夜学生への共感句。戦後の経済事情の厳しい時代の話ではなく、只今の問題であろう。灯を見つめる眼は真剣そのもの。どこに時代の本質があるか、見極めるのが俳人の良心である。

秋旱腰の坐れる呂宋壺　川村　五子

ルソンはフィリピンの古称。堺の豪商呂宋助左衛門が戦国時代にルソン島との貿易で彼の地から日本に移入した貴重な陶磁器の壺。その産地がルソン。秋旱とは気づきが非凡だ。以下十二音字との配合が巧み。好調である。

陰が翳生むやうに咲く帰り花　田中　純子

丁寧な言葉の斡旋である。帰り咲きの花の自己主張は「陰」の演出である。翳に生きる花の「人生」とでもいいたい。俳句の深さは気づき。満遍なくよく気が廻る。

月光の弦張るごとし浄瑠璃寺　原田　宏子

わが推奨の古寺。夕月の頃合いか。風景が左右対称の美しさ。平安貴族が創り上げたこの世の極楽風景である。作者は眼が高い。花咲き草萌える春、時鳥がふんだんに鳴く夏、誰も行かない雪の冬。珠のごとき月光に包まれる秋がいい。

白雪糕もんぺスーツで売りさやか　松井　弓

注釈がいる。出雲崎の菓子老舗大黒屋の名菓が白雪糕。亡き黒田杏子お得意の店で、その店のご長女が杏子さんのもんぺスーツを纏っていたという次第。嘱目句。

今月の秀句

暾の沖へ沖へ梵天立てにけり　有手　勉

「木更津」と前書がある。一月七日早暁に、成人男子が御幣を付けた長い竿・梵天を我先にと海中に立てる神事である。大漁祈願を掲げ、男たちの成人式。人生の通過儀礼としての勇壮な禊であろう。出羽三山信仰の修験の梵天祭は全国にある。勉の句が上昇中なのがうれしい。

漉油枯れて白きに残る蒼　金子　圭子

たらの芽に似たウコギ科の漉油。春先の山菜ではなく、秋の枯木詠が珍しい。たらの芽も枯れた姿は注目されないが、そこに残る漉油が蒼を留めるとは気づきが鋭い。

冬ざれを来て魔術師の口から火　竹岡みち子

枯れ枯れした上野公園あたり、あざやかなドラマを捉えている。気が張っている。黒いマントの魔術師が突然口から火を吐く。パフォーマンスであろう。背後には広告宣伝などの計算があっても、聴衆にはアクシデント。現代の世相の一面を捉え、句が生きている。

水蜜桃迦陵頻伽の声欲しき　宮澤　羅夢

寺の壁画などに書かれる極楽の鳥、迦陵頻伽。美しい声が魅力。水蜜桃との取り合せにより限りない浪漫を演出したもの。多彩な作者だ。今年、どんな夢を齎すか楽しみ。

名月の檄や糸満大綱引き　上江洲萬三郎

満月の夜に綱引きをやる。南九州から沖縄にかけて。男綱、女綱を合せた大綱を引き合い、子孫の繁栄を占う。そこに籠められた意味は、災厄を払うなど、限りなく多い。綱により仏を引き寄せ、また送る。絆の島沖縄の大綱引きは、盆の一大行事だ。

一両の列車の矜持今朝の冬　白勢　修

山漁村ではしばしば一両列車が走る。立冬ともなると、住民にとっては命の綱。使命をもって走っている。信州では別所線辺りが目に浮かぶ。一両列車の句は多いが、「矜持」が良い。

地を叩き祖とつながる十日夜　古畑富美江

十日夜の藁鉄砲が祖先と繋がる絆とは、完璧なイメージが浮かぶ。「地を叩き」がいい。地に眠る祖先を起こし、ともに月の光のもとで実りを感謝し合うのである。

俳句に賭ける―句「つを藜の杖を突いて冥土までとは気合が入る

句一つを藜の杖と冥土まで　渡辺　光

その志やお見事。演出があるにしても、新年を迎えた意気込みが素晴らしい。藜の杖を突きとは古風な喩えであるが、新年は古風さを噛み締める時。作者にとって、今年開眼の一句が生まれるように祈りたい。

神の留守青ざめてゐる海の底　池間キヨ子

沖縄の海詠。陰暦十月、地域の神が出雲に集まる。その頃、沖縄辺の海底が青ざめる。なぜか。教えてほしいのであるが、出雲の伝承と沖縄の自然の海との照応があるものか。不思議な気持ちになった。

幕末はつるんと脱げし衣被　高橋　秀雄

この作者は異色中の異色。信州大学の学生時代から奇想の持主であった。里芋がよく剝けるのは幕末だという。里芋も徳川幕府の弱体化を承知していたのであろうか。里芋に時代が変わる予知能力があるのであろうか。どこか可笑しい。

もの忘れ一気につのる野分あと　横地　妙子

すべてを台風が攫っていったものか。大風が過ぎたあとの快晴、虚を突かれたような空っぽな気分を、もの忘れが一気に募ったとお道化たところに俳味がある。

鶏頭のなんまいだぶと倒れけり　石川　定雄

ぎりぎりまで持ち堪えていた。もうこれまでと、ある日、鶏頭が倒れた。鶏頭でなければお芝居の役者にはなれない。経文を唱えながらという信心深い鶏頭にご苦労さんと言葉をかけた。面白い。

今月の秀句

青北風や磨き抜かれし八点鐘　宮岡　光子

船のクルー（仲間）に時を知らせる合図は鐘を鳴らす。零時半は一点鐘、三十分置きに知らせ、一時は二点鐘、すると、四時が八点鐘。十月の夜明けの青北風（秋の強い北風）に爽やかな八点鐘を聴く。山国育ちで船に疎い者にも、すかっとした快音が身に響く。全身で骨太な句を作り出す力量抜群の作者。

目の大き能登の魚へ白き息　熊倉まりあ

冬の早朝か。災害続きの能登の海から上がった魚。魚も驚いた風情。作者ははあはあ息を吐きながら対している初々しさがある。かすかな驚きもいい。作者二十四歳。

にんにくを植う末法の世に備へ　栗原利代子

末法の世とは仏心が希薄になりつつある世。鎌倉時代に終末感が濃厚になり、新仏教がぞくぞくと誕生したことは周知である。現代は信仰の世界もてんやわんや。末法には地震の災害なども入ろう。にんにくを植え、備えるくらいで大丈夫なのか。ともかく、好きな餃子のためにもにんにくを植えるという。

氷上のクイーン手脚すーつと伸ぶ　森　みゆ紀

地上よりも氷上が檜舞台。たちまち目を見張る自在な演技に沸く。着想が自由。俳句に透明感が溢れる。

秋天にスマッシュを打ち男逝く　長島　環

なんと去り際のドラマが激しいことか。最後の一瞬に賭けたような人生に涙する。

来つ寝とて優男なむ狐待つ　森　千恵子

掛詞自在。貞門・談林なんでもござれ。「来つ寝」（狐）を待つ優男。化かし合いの妖艶たるメイクに感心した。

たましひの抜けるまで佇つ枯蓮　神作　仁子

池沼の冬枯れの蓮。無惨なさまを、魂が抜け、腑抜けとなったと見たもの。魂はどこへ浮遊したものか。

稲滓火の青き魂抜けて終ふ　倉科　繁登

田仕舞の稲滓火を凝視している。青白い煙が上がり、やがて白煙のみとなる。魂を青と見定めた炯眼に感銘する。

稲叢の濱口梧陵津波の日　瀬戸　正男

十一月五日が津波防災の日。作者が思い出すのは同県人の濱口梧陵だという。紀州、和歌山県広村（現広川町）の人。一八五四（安政元）年の南海大地震の時の大津波に、刈り取った稲束（稲叢）に火をつけて村人を高台に誘導し、災害から救った。その後大堤防を築き社会事業に尽力するなど、見識に富んだ偉人。後年の政治家、実業家としても周知の人。手堅い作として記憶されよう。

冬近しカミンフェガーが戸を叩く　田多井勝喜

カミンフェガーは煙突掃除人。会うと幸運が来るとか。ドイツの伝承である。暖炉があり、煙突掃除が必須のヨーロッパの冬詠として身近に感じられる。

推薦候補作をあげる。

墓仕舞ひ読経さなかを雪迎　幹　自聲

吾亦紅雨にうたれて寂びにけり　瀧澤征矢子

鯊の秋沖を離れぬ軍船　高橋　洋子